

鼻にかかった軽い声。  
屈託のない歌声は、  
戦争の、あの惨禍など微塵も感じさせない  
青空を突き抜けるような  
解放感に満ちていた

文 山川智

憧れの地はハワイだった  
日米開戦の火蓋を切った象徴の街  
ホノルルさえ織り込まれた歌詞だった  
だが、岡晴夫の軽快な美声は  
戦争の無残をどこにも感じさせなかった  
歌が街中に流れた頃、日本は焦土を踏みしめ  
復興への槌音が、若き心臓の如くに  
力強く鼓動を打ち鳴らしていた  
町街には前進への希望のともし火が  
明明と人々の顔を照らし始めていた  
「憧れのハワイ航路」の「ハワイ」とは  
過去を見つめ直すための原点回帰であり  
新天地へ向かうための嚆矢濫觴であり  
「航路」とは未来への道を意味していた  
へ別れテープを、笑顔で切れれば  
望みはてない、遙かな潮路  
歌詞の切れ切れに含ませた暗喩は  
国も人も過去に別れを告げて  
新たに旅立つことへの励ましであった



## 昭和歌謡 誕生物語

【第28曲目】

# 憧れのハワイ航路

岡 晴夫

へはくれたそらく、そくよぐかぜく  
独特の鼻にかかった歌声。敗戦国日本にとって忘れ難いハワイへの憧憬をテーマにした『憧れのハワイ航路』が発売され、大ヒットしたのは昭和23年のことだ。

歌ったのは、オカッパル。こと岡晴夫。戦前戦中に『上海の花売娘』『パラオ恋しや』をヒットさせた人気歌手である。

とはいえ、鬼畜米英からわずか3年。しかも、戦争開始の舞台を憧れの地と夢見る？曲がヒットしたのはなぜなのか。

作詞家の石本美由起は実際のハワイ航路を見たことがなく、瀬戸内海や伊豆七島を航海する船をイメージして書いたそう。実際には戦前、横浜・ホノルル・サンフランシスコ間を就航していたハワイ航路には、日本郵船の浅間丸と龍田丸、秩父丸の3隻の豪華客船が使われ、当時、横浜・ホノルル間は9日、ホノルル・サンフランシスコ間は約4〜5日、つまり横浜からサンフランシスコまでは、おおよそ2週間の船旅だったと言われる。

だが、3隻ともアメリカ海軍の潜水艦魚雷で沈没。戦後になり復活したのが煙突に鷲のマークを施したプレジデント・ウイルソンとプレジデント・クリーブランドという歴代大統領の名がついた2隻の豪華客船だった。

ただ、昭和23年には外貨持ち出し規制もあり、庶民にとって海外旅行など夢のまた夢。だからこそ、聴衆はそんな夢が詰まった歌詞に豪華客船に立つ自分を投影させ、軽快なメロディにマリンプルーのような明るい未来を予感させたのだ。だから、横浜港からハワイに向かう姿をイメージした、あのマドロスタイルでステージに立つ岡の姿は、日本人の希望であり「憧れ」だったのである。

考えてみれば、戦争という嵐が吹き荒れていた時代、日本人の気持ちの中から「青春」という言葉は忘れ失っていたであろう。その反動からみんなが「青春」を取り戻そうと必死だった。

一見ノー天気にも聞こえる岡晴夫の歌声には、暗い気分を吹き飛ばす屈託のない明るさがあった。その明るさこそが敗戦の傷を癒し、新しい時代の幕開けを予感させてくれたのだ。

現在、ハワイへの旅は空路に代わり、成田、関空などその数は週に約170便と言われる。戦後70年。時の流れは驚くべき速さだが、その中でもヒットした歌は時代を反映して余すところがない。

山川智●1962年東京生まれ。テレビ制作会社週刊誌記者を経てフリーランスに。著書に『東方神起の涙』『東方神起 JYJを行く』(共にイーストプレス)、『ヒュランダキユメント 幸せのきずな』『リープ出版』など。また出版プロデュース作品として『生きる 義家弘介』(スターツ出版)、『デキる社員』(狂食ギヤル)共にイーストプレスなど多数。